

ホコリタケを土から掘り出してみると、短い柄に直接子実体がついているとわかります。根のように見えるのは菌糸束です。そもそもキノコ（子実体）というのは、胞子をつくって拡散させるための器官で、生物体の本体（菌糸）は地中や樹木（多くは朽木）の内部にあります。

ホコリタケは一名「キツネノチャブクロ」とも呼ばれています。その和名も異名の由来も、写真のような若い子実体ではわかりません。このような子実体が半日～1日たつと、内部に古綿状の組織と胞子が形成され、風が吹いたり動物や虫、それに雨粒等が当たると、頭部に開いた小さな孔から胞子を拡散させるのです。

私はこの小さな子実体を持ち帰って、切断して観察してみることになりました。その様子は次回紹介します。

(2023年9月下旬／北軽井沢)

